

光は闇のなかに輝く 世界のなかの日本の未来へ

新型コロナウイルスに世界が翻弄されるなか、私たちは「世界のなかの日本」の今後を問いただされている。規律正しく予防し、真面目に自粛する国民性が世界から称賛される一方で、リモートワークを阻むハンコ文化や商習慣、「人・紙・対面」志向の行政サービス・教育・医療、PCR検査・給付金支払い問題で露呈した有事の政策実行体制、海外依存のサプライチェーンなど、多くの本質的課題が浮き彫りになった。今回の災禍は、さながら眠りを覚ますウェークアップ・コールのようである。

経済社会の「レジリエンス(しなやかな強さ)」が強く求められるなか、静脈産業に身を置く私が意識する3つのキーワードがある。

1つ目は「デジタル化」だが、これは論

を待たないだろう。リモートワークの普及は、ワーク・ライフ・バランスを高め、ジエンダーダイバーシティの促進にも資する。また、大都市に居住する必要性が薄れ、地方への人の流れを後押しするだろう。

2つ目は「グローバル化」だ。現在、世界は渡航制限でさながら鎖国状態だが、人口減少で国内市場がしぼむ日本にとって、このまま鎖国を続ける選択肢はない。日本の未来は世界とともにある。他方で、国内においては、中央集権型から脱却し分散型の社会をつくっていくことが、食料・エネルギー・自給の点からも重要だと思う。そして、自立した地方(ローカル)が世界(グローバル)と直接つながってゆく。

3つ目が、「サーキュラー(循環型)化」だ。資源を使い捨てにするリニア(直線的)



ヴェオリア・ジャパン社長
野田 由美子
のだ ゆみこ

経済社会モデルを脱却し、廃棄物から資源やエネルギーを生み出す循環の創造は、海外への資源依存や環境負荷の低減に資するだけでなく、地域に新しい産業を生み出す可能性をも秘めている。

これら3つの歯車がかみ合えば、人々の生活の質は向上し、地方は真に活性化し、レジリエントな経済社会が実現すると信じている。

今、私たちは、先の見えない闇にいる。しかし、光は、トンネルの先にあるわけではない。「光は闇の中にある。闇は光に勝てない。」ヨハネの福音書に記された言葉だと教えていただいた。経団連の活動が、日本そして世界の闇に輝く光となるよう、皆様のご指導をいただきながら、力を尽くしてまいります。